㉔ 井原鎧溝遺跡

■江戸時代の天明年間（一七八一～一七八八年）と言われる時代の次市という農民が溝を掘り返していたところ壺が現われ、中から朱が流れ出したため、多数の副葬した〈甕棺〉が発見された。これが井原鎧溝遺跡である。（②一五七頁。③一十六頁参照）

・井原村の次市という農民が溝を掘り返していたところ壺が現われ、中から朱が流れ出したため、多数の副葬した〈甕棺〉が発見された。これが井原鎧溝遺跡である。（②一五七頁。③一十六頁参照）

・壺のなかから、方格規矩鏡二一面（全て中国鏡）、巴形銅器三個、刀剣の類、鎧の板のようなものなどが出土したという。

・埋葬主体は、大形の〈甕棺〉とみられる。

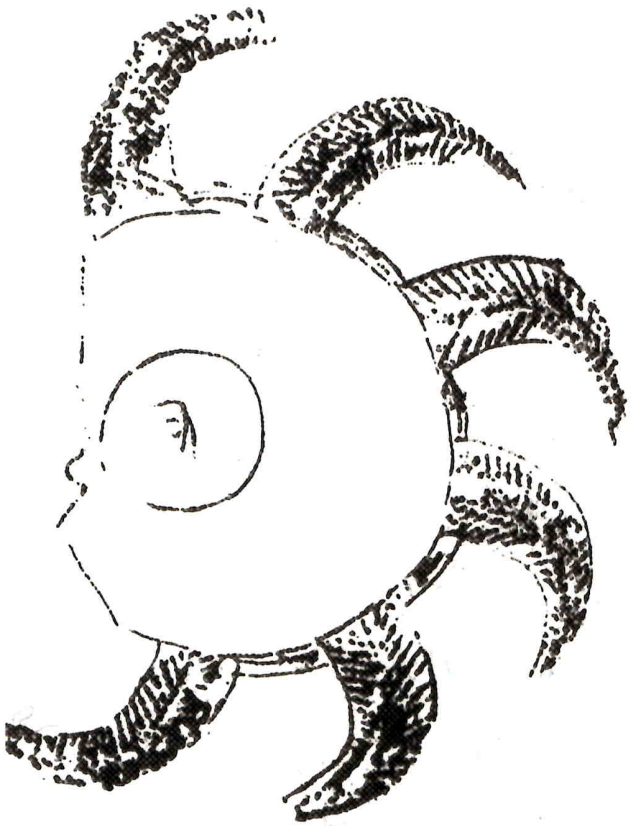
・残念ながら出土遺物等は現代に伝えられていない。

・とはいえ、青柳種信が書き著した記録『柳園古器略考』によってその概要を知ることができる。（第211図参照）

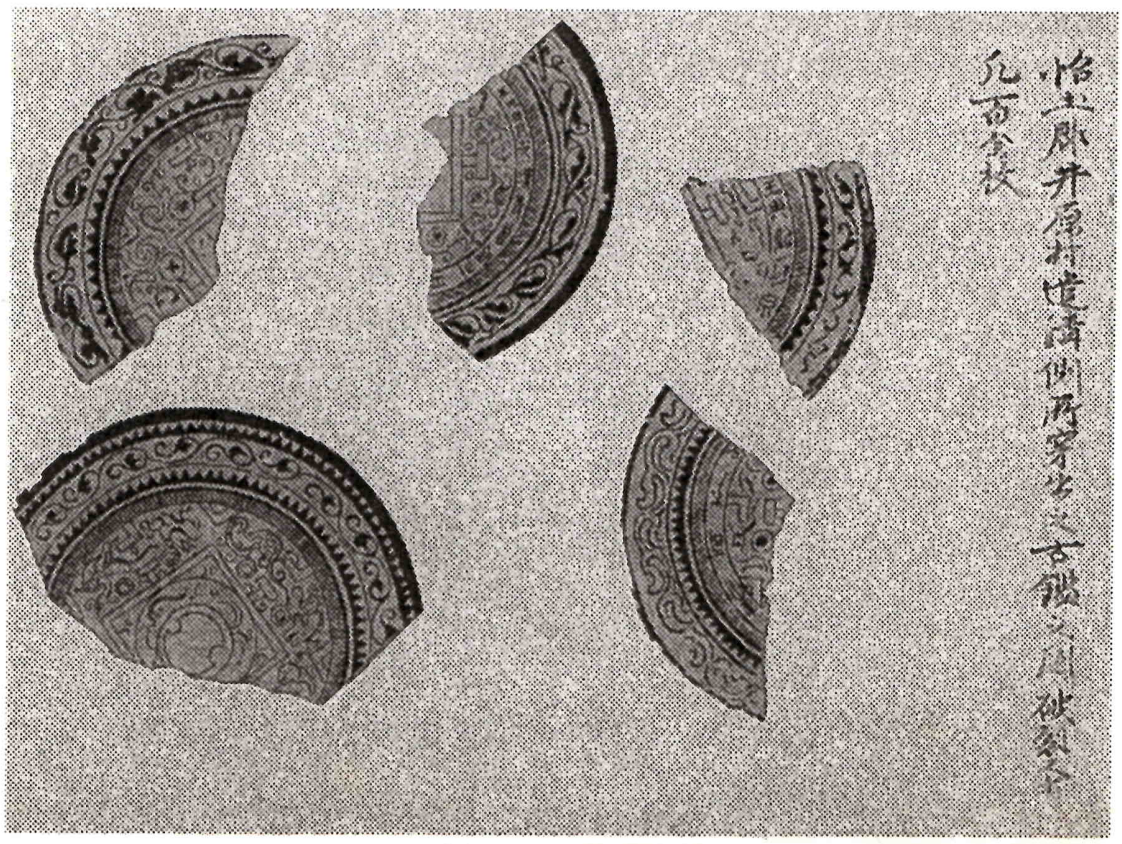
・出土品の細密画からみて、弥生後期初頭（西暦一世紀後半）の墳墓で、三雲南小路遺跡に後続する王墓であろうと考えられている。（①一

・1頁に大きくはみ出て掲載下さい。

表紙



江戸時代に発見された井原鎖溝遺跡の記録（柳園古器略考）



第211図　『柳園古器略考』（青柳種信著）の一部

『伊都国遺跡ガイドブック』糸島新聞社、平成13年4月発行、口絵(上)、57頁(下)参照。

※上記の著作権許諾をとっておいて下さい。（学生だからです）

「伊都国王都・三雲遺跡」展 4ページ 11頁

伊都九珠三雲 ク72ページ-19/23 の ク72ページ-9/23

伊都国遺跡ガイドブック 57ページ

現在 ク72ページ-16/18行
後 ク72ページ-16/18行

二四二ページ五頁。②ー五七ページ八頁。③ー十六頁参照）

・その後、井原鑓溝遺跡が何処に有ったのかすっかり忘れ去られてしまったものの、三雲南小路遺跡の南約百メートルあたりに「大字井原字ヤリミゾ」という地名が存在する。

・この付近の地下に、井原鑓溝遺跡は眠っているのだろうと言われている。（②ー五七頁参照）

（601ページ）

第209図の三雲・井原遺跡一帯から、平面視「円形」・「隅丸方形」・「隅角方形」の竪穴式住居が、数多く混在かつ密集した状態で見い出された。④ー四ページ五頁、八頁参照）

＊扶余系般民の子孫、および箕子の子孫等の遺構なのではなかろうか。

・そして、各種石器（石庖丁・石斧等）、砥石、土器、農具（U字形鋤先）、銅鉾、銅鉇、鉄器（素環頭刀子）、紡錘車、甕棺墓など多数が出土した。④ー四ページ十一頁参照）

三雲・井原遺跡の「王の家臣の墓とみられる」木棺墓の棺内から、中国・後漢代の鏡などとも

（二五ページ～二二〇ページ）

コクヨ ケー20 20×20

多数

数多く 611

に三千個以上の青や紺色系小玉が出土。その中に、紫色の小玉が四四個含まれていた。

・また、奨棺墓から出土した青色小玉約七五〇個の中に、四個の黄色小玉があった。（図版179参照）

・紫色小玉は、酸化カリウムを多く含むカリガラスで、インドから東アジアにかけて分布

黄色いのは、ソーダ石灰ガラスで、西アジアから北アフリカ・ヨーロッパに分布する玉と判明した。

・紫も黄色も、当時の日本では生産不可能な着色・技術が施されており、流入品の可能性が高い。

・鏡の出土状況から、楽浪郡（現在の北朝鮮平壌付近）を経て、伊都国へ齎されたと考えられる。（「朝日新聞」平成二十二年九月四日付（黄・紫玉、世界結ぶ）参照）

＊「後漢代の鏡と共に出土」・「奨棺墓からの出土」

という点からみて、紫小玉や黄色小玉を身に付けていたのだろう」と想像される。

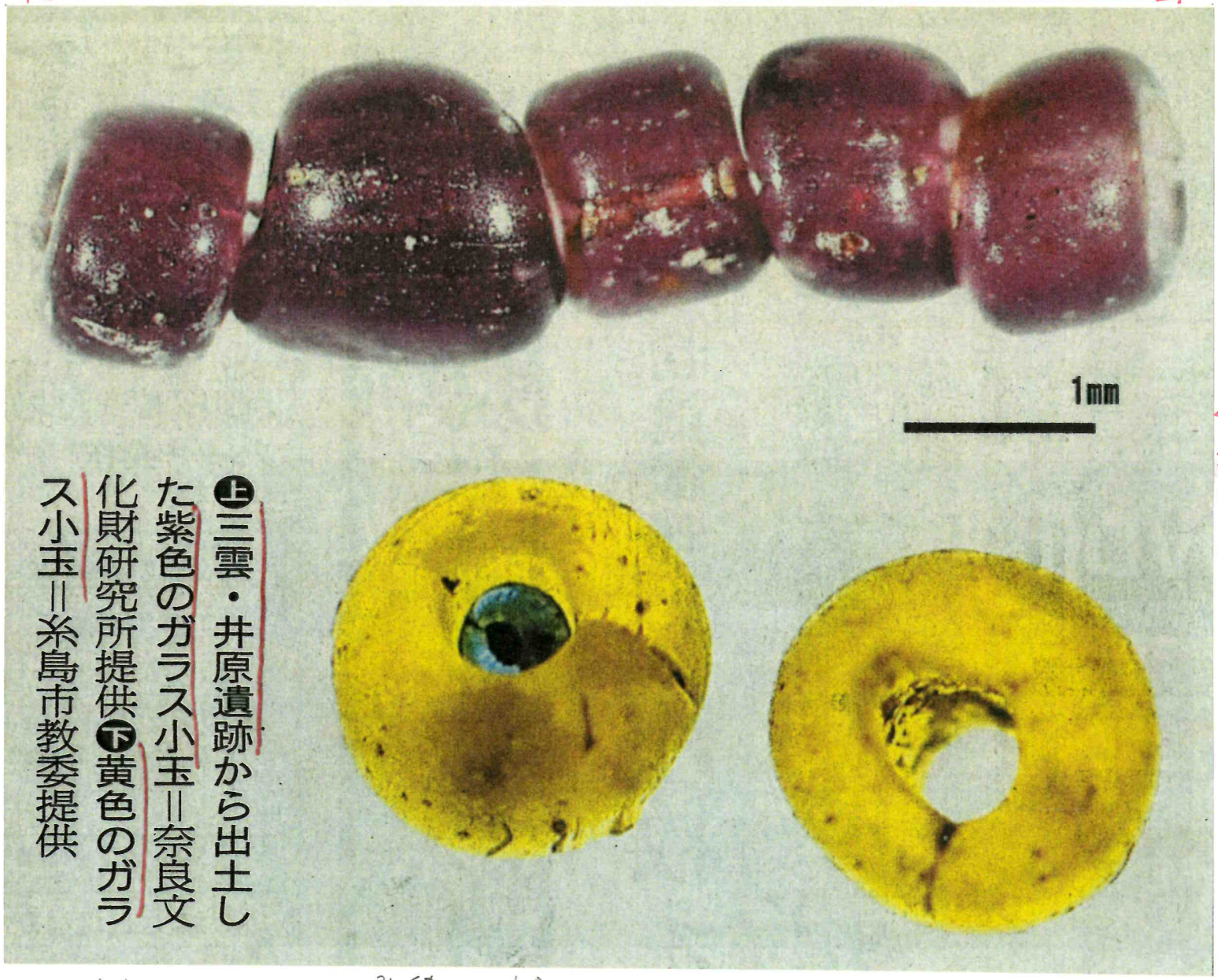
772P- 21/23

原本 10センチメートル

・カラーで見の上半分に掲載下さい。
・原本はもっと透明な感じです。
・黒っぽくならないようにして下さい。

『伊都国歴史ガイドブック』の見開き
原本(朝日新聞)
ファイルしている。

赤い縦線トル



(上)三雲・井原遺跡から出土した紫色のガラス小玉＝奈良文化財研究所提供 (下)黄色のガラス小玉＝糸島市教委提供

新聞の裏面の字を除いておいて下さい。

赤い縦線トル

130G 140G 写真図版 179 三雲(みくも)・井原(いわら)遺跡出土のガラス小玉

『朝日新聞』平成22年(2010)9月4日付〈黄・紫玉 世界を結ぶ〉参照。

120G ・当時の日本に無かった着色剤(ちゃくしょくざい)が用いられている」という。 613P

令和元5.10(金)～5.10(3回)
令和元(2019)12.10(火)～12/11(3回)

弥生時代(Ⅲ) 258～7

次頁 18行に続く

ところで、次のような見解がある。

「三雲遺跡群では、弥生後期に入ると、それまで盛行していた甕棺墓制が消えて、箱式石棺が現われてくる。副葬品も、石器類が完全になくなり、代わって鉄器の副葬が目立つ」

という。(①一二五六頁や第3表参照)

下 12/11
12/11

772～22/23

(中)772～11/17 西新式
新や(2)-307 南494～6/18

諸査の過程で明らかになった。

イルト 弥生時代は下るか 象徴的な出来事が発掘

(一九七八年)昭和五十三年一月、三雲遺跡の中のサキゾノ地区の住居址から、九州在来の最後の弥生式土器といわれる西新式土器群にまじって、土師器の中でも一番古いといわれる庄内式甕(第151図)(タタキ技法を用いた土器)(参照)の完形品が見い出された。

この住居址では、ほかに山陽、山陰系の土器も見つかっており、土製勾玉・ガラス玉・赤色顔料も出土したことから、(祭祀に関係した)弥生終末期の住居とされている。

6/14

コクヨ ケー20 20×20

トル

もっとも、はっきりした祭祀習俗に新しい要素が最も保守性の強い葬送儀礼に加わるのは、一般的に容易ではない。

トル

タタキ技法を用いた庄内式甕の流入という社会現象は、丹後地域における政治勢力の変化をも窺わせる」

トル

という。（Ⅰ―二五六～七頁参照）

あるいは、

・天日槍やその子孫等は、朝鮮半島南東部から、最古式の土師器の製法を取り入れた。

・極南界の八代あたりから、タタキ技法が伝えられた。

・倭人達

・天日槍の子孫達は、領有を東の方へ広げ、北の奴国、彦島、さらには東国の支配下にあった〝山口地方をも奪い取った〟ということなのではなかろうか。

―

「平原遺跡」

と怡土国一帯での「政権交替」を如実に示しているのは「世界最大の銅鏡」日本製内行花文鏡（直径四六・五㌢）が五面も出土したことで名高い「平原遺跡」なのではなかろうか。（③―十七頁参照）

（第3巻）615

コクヨ ケー20 20×20

HV

773P-1/18

大も 蛋白石 大も オパール

「古代の日本」(3)九州 59P 「伊都」古代の鏡 原田大六氏も八咫鏡説

「伊都国」遺跡ガイド」57 にルビ有る。

「伊都国」遺跡ガイド 34~35P 地図 平原、みくもいわら 三雲の井原

「らいぜんがわ 雷山」 H19(2007) 1.23 順子さんと確認した箇所有った。括弧フリガナがつけられていた。

cc! ㊦クワ2-3 三雲・井原遺跡

「伊都国」遺跡ガイド 65P 48°に地図有る

●福岡県前原市平原遺跡は、高祖山(一六一メートル)の西北方約四キロ(三雲・井原遺跡の西北方すぐ)へ雷山川と瑞梅寺川とにはさまれた曾根丘陵の北端にある。(第209図参照)

■昭和四十年(一九六五)一月、井手信英氏が裏山の畑で密柑の苗木を植えるための溝を掘っていたところ、突然、多量の朱とともに大小の鏡の破片や鉄刀片が出土した。

■この偶然の発見を契機として発掘調査が実施された。(③-十七頁参照)

●遺構は、東西十八メートル、南北十四メートルの長方形をした方形周溝墓で、その中央部に割竹形木棺(長さ約三メートル、最大幅八〇センチ)を納めた痕跡が発見された。(後に追加されて四つの面。四面ともいう)

●この方形周溝墓から、合計三九面分にのぼる破砕された銅鏡や鉄素環頭大刀、ガラス・メノウ・コハク・蛋白石(オパールの類)製の装身具等が出土した。

●周溝には、ガラス玉多数を副葬した土壙墓(割竹形木棺)が一基あった。

●また、この方形周溝墓の東に隣接して三基の円形周溝墓が発見され、その他周辺からも

620P下、小円墳

416m

地名辞 918P いかづちや cc! ㊦クワ3-8/n 3行

㊦クワ4-13九21行

616 (第3巻)

「古代の日本」(3)九州 59P 上下 42面

㊦クワ2-9/23 新No.101図

「弥生時代」解説-1 240以上有

㊦クワ2-9/23 601

③-2行

都国 40面 遺跡ガイドブック 68P

同絶鏡 大鏡が映した世界54P

「伊都国」遺跡ガイドブック 54頁 1443ページ 1/3 同型鏡？

大鏡が映した世界54P

多数の土坑墓が見い出された。（四〇面もしくは四二面）

・平原遺跡から出土した銅鏡は実に三九面もあり、弥生て古墳時代を通じ（図ル）一墳墓から出土した鏡数としては我が国最多を誇った。

・そのうち同ケ鋳鏡四面（二〇〇〇年一月に五面目が確認された）は直径四六・五センの日本製（前々頁）内行花文鏡ムは、世界最大の銅鏡で、中国大陸の朝鮮半島、日本列島にも類例が無い。

・なお、これらの巨大鏡の鏡背の図文は、他に例が無い。

（リーており）

（第3巻）617

・しかも、鋳バリなどの無い精巧な超大形鏡で鏡厚も分厚く、他には見られない優品として知られている。

・また、高度な技術を駆使して造られた各種のガラス製装身具も注目される。（③ー十七頁。およびⅠー二五八頁、②ー六五ー七二頁、⑤ー五九ー六〇頁参照）

⑤ 国営平原墓地。

伊都国 古代の鏡17P

巨コ計200P

大鏡が映した世界60P

「伊都国」68P

同絶鏡

同型鏡？

田773ページ 3/17 左側と合わせる

1984.45年2月発 古代の時 九州59下 42面

平成13年4月初 伊都国 遺跡ガイドブック 68P 40面 第6項 12行

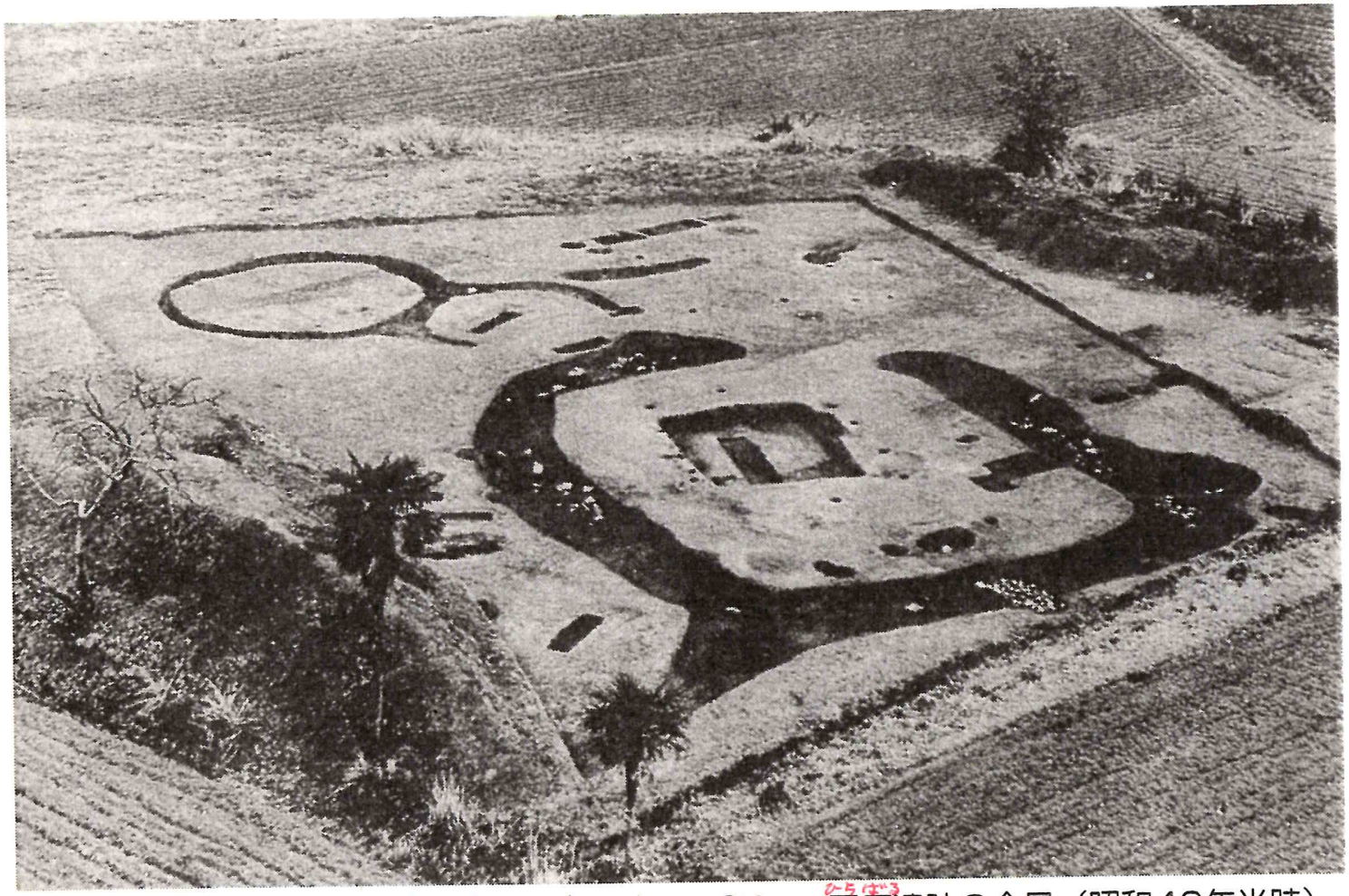
コクヨ ケー20 20×20

39

新羅の方形周溝墓 ㊟328ページ18/19
写真図版14

773 P-3/18

・右頁の上半部に載せたい。



142ページ 写真図版 180 平原遺跡の全景（昭和40年当時）

中心ぶりわけ

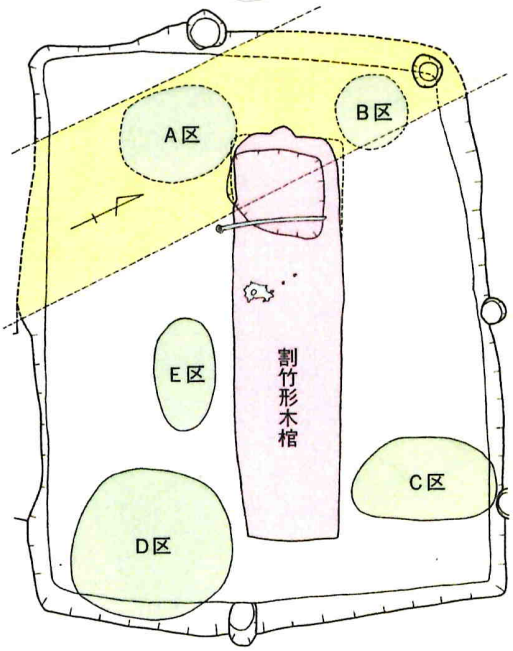
132ページ
『伊都国遺跡ガイドブック』糸島新聞社、平成13年4月発行、66頁参照。

128ページ
• 写真図版14 新羅の墳墓［蔚山（ウルサン）茶雲洞、木棺を伴なう周溝墓］と、心做し（こころなし）か、似（に）ているようにも思われる。

㊟328ページ18/19 新やC17-321

・カラー
・大きく載せて下さい

左頁の下、右寄りに載せて下さい。



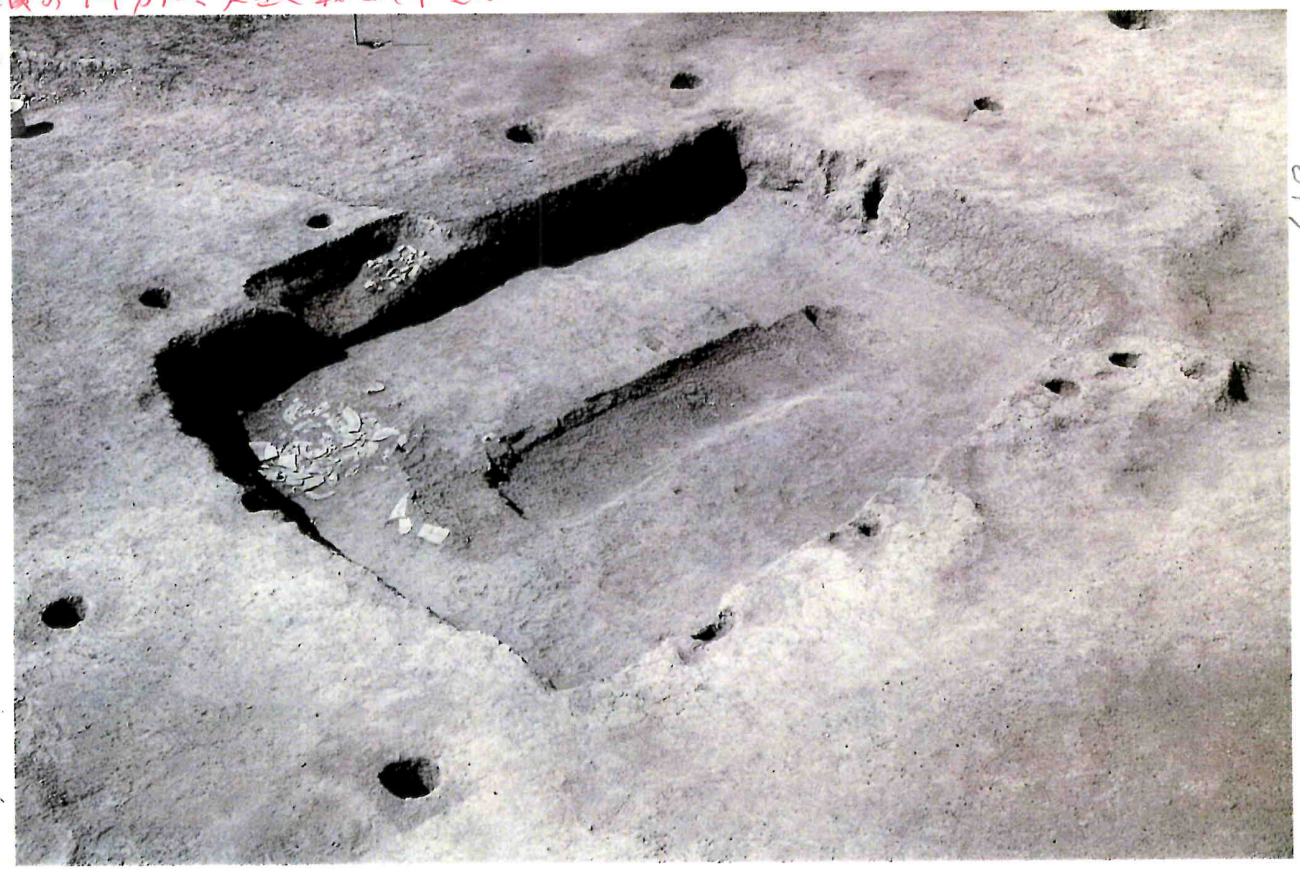
□は割られた鏡が出土した場所

平原一号墓墓坑内銅鏡出土状況模式図

トル（由クラス P－6/18 と同一）

平原1号墓墓坑内D区銅鏡出土状況

右頁の下半分に、大きく載せて下さい



トル（平原1号墓主体部全景）

177 P－4/18

619

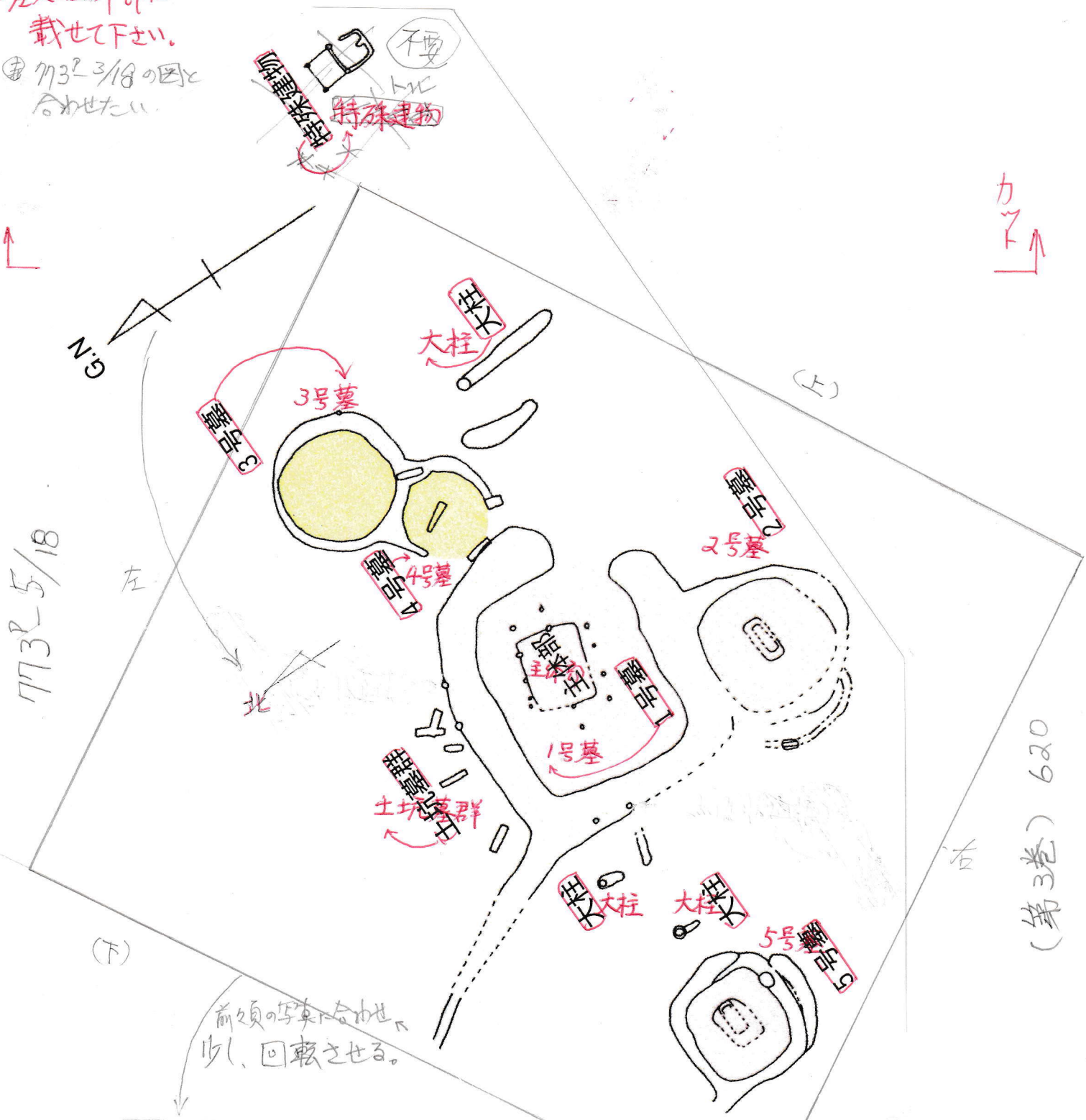
13QG 平原1号墓主体部全景

14QG 写真図版 181 平原1号墓

13QG 『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館、平成18年10月発行、38頁参照。

12QG ・破砕された鏡片が、当写真の左側2ヶ所に多数集まっている。

・カラー
・左頁の上半部に載せて下さい。
※ 773-3/18の図と合わせたい



140字

第212図　平原遺跡の主な遺構配置

130字

『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館、平成18年10月発行、29頁参照。

120字

・平原遺跡から、弥生時代後期の墳丘墓3基（赤表示）と、古墳時代の小円墳2基（黄表示）が確認された。1号墓には、東西長14m、南北幅10.5mの墳丘が有る。

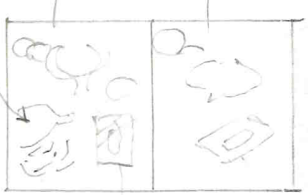
40

※773-1/17 東西18m 南北14m
※773-9/17土坑 東西4.6m 南北3.5m

773P-6/18

→カット

・カラー
・左頁の下(5/4頁)
左寄りに大きく
はみ出して掲載
下さい。



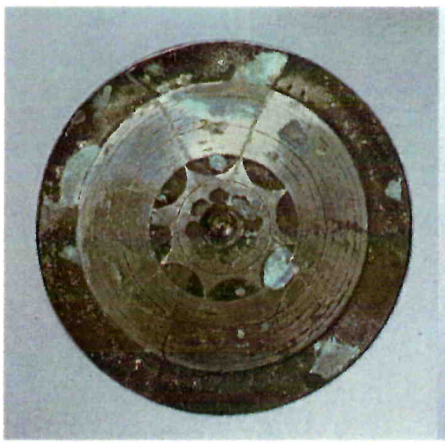
14QG 口絵図版182 平原1号墓坑内D区銅鏡出土状況→

13QG 『戦後50年古代史発掘総まくり』朝日新聞社、1996年4月1日発行、97頁参照。

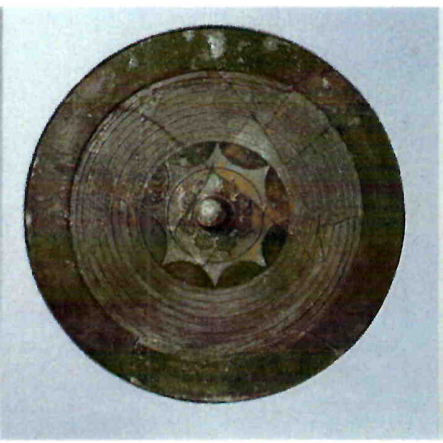
621P

・カラー
・左頁全面に、大きくはみ出して掲載下さい

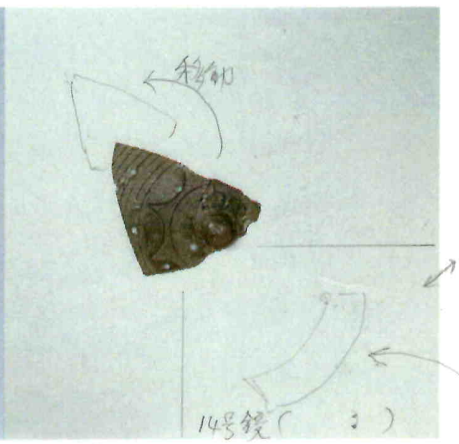
11号鏡　内行花文鏡（鏡径46.5cm）



10号鏡　内行花文鏡（鏡径46.5cm）



12号鏡　内行花文鏡（鏡径46.5cm）

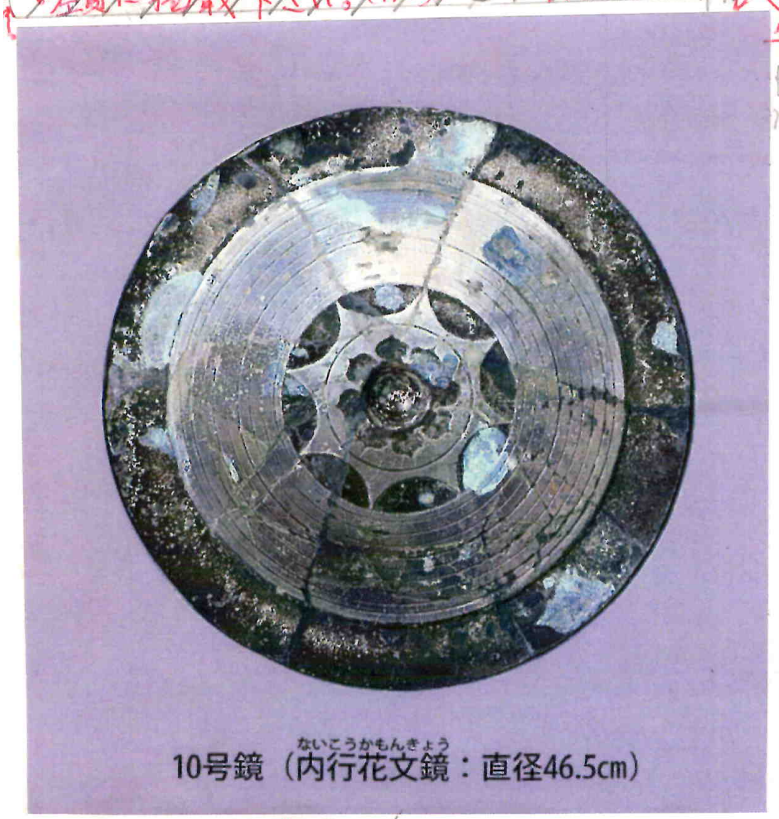


13・14号鏡　内行花文鏡（鏡径46.5cm？）

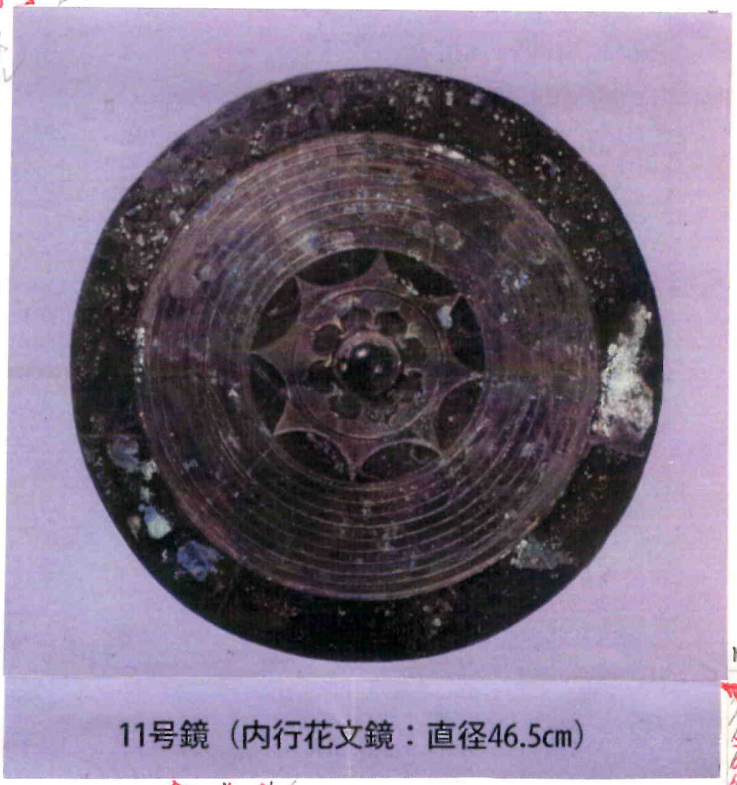
写真図版183福岡県前原市平原遺跡出土の内行花文鏡（直径：46.5cm）
「伊都」古代の糸島、前原市教育委員会、2002年11月30日改訂版、18頁、他参照。
・上から見た免田式土器（第136図）との類似性が感じられる。

免田式土器 第Ⅳ(2)-225頁 P.622
773 P - 7/18
免田式土器 第Ⅳ(2)-225頁上 P.14/14
背景は紫色のまま
ここに、次頁右下の14号鏡を挿入して下さい
第136図 第Ⅳ(2)-225頁上
数文字 773P-14/14

・カラー（次頁の写真の直前）
・左頁に掲載下さい。（服部 一杯大きく）



10号鏡（内行花文鏡：直径46.5cm）



11号鏡（内行花文鏡：直径46.5cm）

12号鏡（内行花文鏡：直径46.5cm）

13号鏡（内行花文鏡：46.5cm）

14号鏡（内行花文鏡：46.5cm）

写真図版　福岡県前原市平原方形周溝墓（1号墳）出土の内行花文鏡　5面
・全て、直径46.5cm（外周約146cm）の同笵鏡である。←（）内
『国宝へ 平原王墓出土品』前原市教育委員会、A2版（平成19年6月八千）、表紙・裏面参照。

20号鏡（方格規矩鏡：18.5cm）

21号鏡（方格規矩鏡：20.8cm）

22号鏡（方格規矩鏡：18.7cm）

23号鏡（方格規矩鏡：19.1cm）

24号鏡（方格規矩鏡：18.8cm）

25号鏡（方格規矩鏡：18.8cm）

26号鏡（方格規矩鏡：18.3cm）

27号鏡（方格規矩鏡：15.8cm）

28号鏡（方格規矩鏡：18.2cm）

29号鏡（方格規矩鏡：16.5cm）

30号鏡（方格規矩鏡：18.9cm）

31号鏡（方格規矩鏡：18.6cm）

32号鏡（方格規矩鏡：18.8cm）

33号鏡（方格規矩鏡：18.8cm）

34号鏡（方格規矩鏡：16.6cm）

35号鏡（方格規矩鏡：16.6cm）

36号鏡（方格規矩鏡：16.2cm）

37号鏡（方格規矩鏡：16.4cm）

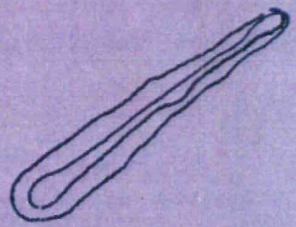
38号鏡（方格規矩鏡：18.8cm）

39号鏡（方格規矩鏡：18.6cm）

40号鏡（方格規矩鏡：11.7cm）

ガラス勾玉

メノウ管玉



ガラス小玉

ガラス連玉（拡大）

素環頭大刀

写真図版 184

『国宝 平原王墓出土品』前原市教育委員会、A2版（平成19年6月入手）参照。

福岡県前原市平原方形周溝墓（号墳）出土の鏡・装飾品・素環頭大刀

624

4分の配置 背景のヨゴレをトル

弥生時代㊃　注差 258'

773'－10/18

古代の時刻九州 59'下

「伊都」古代の糸島 19'左下

①弥生時代 258' 7行

■ところが、この平原遺跡には、疑問点が多い。

(イ)平原遺跡の謎の一つは、鏡(11)副葬される以前から、すでに、

≪全部の鏡が、粉々に割れていた≫

ということである。(①－二五八頁。③－十九頁。写真図版 181・182 参照)

*但し、南から北へ伸びる撹乱内から出土した銅鏡四面は、完形で副葬された可能性もある。(⑦－三八頁参照)

●ともあれ貴重な鏡が、しかも大量に、どうしたわけで割れたのだろうか。

●また、出土した鏡片の残余の部分は、どこに眠っているのか。

(ロ)これまで集落群に近接して営まれた伊都国王墓が、なぜ集落群から離れた丘陵上へ移ったのであろうか。(①－二五八頁。②－一七〇頁参照)

(ハ)さらに『従来は甕棺墓だったのに、一体どうして平原遺跡は『割竹形木棺を主体とする』

コクヨ　ケ－20　20×20

伊都国ガイダンス

との類似性が注目される

625

大鏡が映す世界

「伊都」古代の糸島 19右

「方形周溝墓」の形式をとったのか。

・仮りに古墳時代の造営であれば、何故、前方後円墳を採用しなかったのだろうか。（①—二五八頁参照）

という疑問である。

＊

㈣平原遺跡一号墳丘墓の中心点から見てやや北東寄りに位置する「長方形土坑」（東西四・六メートル、南北三・五メートル）の中央に、「木棺が安置されていた。（写真図版773/4/18 181）へ平原1号墓主体部全景（他参照）

・棺内に遺体は遺っていなかったが、大型の割竹式木棺の痕跡だけがあった。（写真図版773/4/18 184参照）

・棺の中から、多数の装身具が見つかり、特に「耳飾り」は、「耳璫」（耳たぶに孔をあけて着装する鼓形）二個が含まれていたことから、被葬者は女性であったと推定されている。（⑦—二九頁。「広辞苑」（耳璫）参照）

626

伊都 古代の絆 20頁　　佐口大仏 147~188年　　悲劇の金印 弥生時代(II) 奥付にルビ有 258ページ　　クワ3 4/.,5/ 弥生時代II 258ページ

クワ3ページ 7/19　　クワ3ページ 12/18

＊では、その女性は、どういったわけでこんなにも手厚く葬られたのだろうか。

トル

追って見ていくことを述べてみよう。

㊍

平原遺跡一号墓の造営年代たついては、二世紀説、三世紀後半説、四世紀説といった様々な解釈があって、論争が続けられている。

（①一二五八頁参照）

二世紀説

㊎

・原田大六氏は

「典型的な弥生墳墓」と「方形周溝墓」を採用しながら、棺は古墳時代に特徴的な「割竹形木棺」を用いており、弥生時代から古墳時代へかけての過渡的な形態と考えられる。

(イ)「大鏡五面は日本製の同笵鏡だが」出土した中国鏡の大半が後漢時代（二五～二二〇）のものである。

(ロ)なおかつ、古墳時代に副葬された鏡を含まない、

などの理由から、弥生時代後期後半

トル

終末

に築かれたと考え、それは「二世紀中頃」で

コクヨ ケー20 20×20

（ ）をつけて、こう書いてある

627

前久9行

「伊都」古代の稿 20頁

弥生時代Ⅱ 258頁

大鏡が映した世界 29頁 P13/18

大鏡が映した世界 29頁 西新式 P22/13

あったL
と結論づけている。（③ー二〇頁参照）
図四世紀説（古墳時代前期説）
(1)柳田康雄氏は、
「平原被葬者一族は、政治的理由によって一定身分の保障はされたものの、前方後円墳には埋葬されず、小地域首長層と同じ方形周溝墓に葬られたのだろう。云々」
という。（①ー二五八頁参照）
(2)また、
「大型鏡が近畿の前期古墳から多く出土する〈出土傾向〉を重視し、研究者の多くは古墳時代の墳墓と推定している」
ともいう。（⑦ー二九頁、三段目参照）
図ところが平成十年度の調査で、一号墓に隣接する二号墓から、西新式（弥生時代終末）期の壺型土器が出土した。そこで「二号墓と棺を共有し、二号墓に先行して築かれたと考えられる」一号墓の時期は、当該期（西新式）より以前の墳墓であることが判明したL
という。（⑦ー二九頁参照）

弥生時代

なるほど、従来から知られている弥生の王墓と比べると――平原遺跡は、ずいぶん様相が異なっている。

■定かでないが、この物語では、次のように解釈してみたい。

(1)垂仁三年（前二七）三月に、新羅の王の子天日槍が来朝した。

(2)天日槍は当初、糸島半島基部の南側に聳える『脊振山脈』の山中に住みひっそりと暮らしていたのではなかろうか。

(3)ここに倭国は策をめぐらし、天日槍に大々的な軍事援助を行なったものと思われる。

(4)天日槍（およびその子孫等）は、倭国の力添えもあって、高祖山西方の『三雲・井原遺跡』『平野』を奪取した。

ばかりか――九州北辺域を順次侵蝕し、倭国の領土を拡大していった。

(5)ところが『倭国大乱』の最中――箕子達から伊都国の王宮内へ侵入し、手当り次第の破壊

の国々の頂参照（一四七～一八八頃）

え日矛）伝説・伊都国内の柄渠船（日桙）

行為を行なったのかも知れない。

(6)その際、箕子達は、へこれ見よがし〉に鏡を叩き割り、その破片をそこらの大地上や小川などに放り捨てたのだろう。

＊なお破砕鏡は、糸島地域やその周縁部〔佐賀県・福岡県〕からの出土が多く〔石棺墓〕〔木棺墓〕〔甕棺墓〕〔土坑墓〕などから見い出される。(7)—三四し四〇頁。写真図版185参照）

＊あるいは、

〈箕子の子孫達・天日槍の子孫達の双方が〉互いに対戦相手の鏡を打ち砕いていた〉のであろうか。

＊但し、取り落などの不注意により割れた鏡もあるだろう。

(7)辛くも背振山脈の山奥に身を隠していた天日槍の子孫達は、やがて、王宮を奪い返し〈破砕鏡の欠片の多くか、行方不明となっていた。（写真図版183・184参照）

(8)しかしながら〈破砕鏡の欠片の多くか、行方不明〉となっていた。（写真図版183・184参照）

(9)朝鮮半島から渡来した「当初の弥生人達」と同様に朝鮮半島南東部の新羅から渡来した天日槍〈扶余系殷民の苗裔と思われる〉の子孫達も、

「とはいえ」③クク3P-17/17

「た」この行11字 山中 頁9行 ㊀クク4-8/9 11行 ただ 誤き消る

クク3P-15/18

㊀クク4P-8/9 11行 630

37-1 獣帯鏡（飛禽鏡）

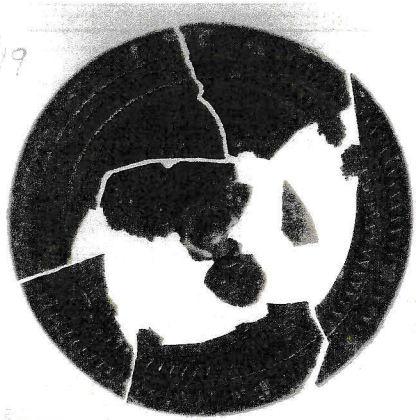
汐井掛遺跡28号木棺墓（福岡県宮若市）

直径8.0cm（復元径）
赤色顔料のかたまりの上に、鏡面を上に向けて置かれていた。

37-2 方格規矩鏡

高津尾遺跡17区13号土坑墓（福岡県北九州市）

直径14.5cm（復元径）
割れ口の一部を磨滅する。



36-3 方格規矩鏡

中原遺跡13415号方形周溝墓（佐賀県唐津市）

直径17.1cm（復元径）
方形周溝墓の周溝内埋葬施設から出土。文様は摩滅し、鏡背には赤色顔料を塗布する。

36-1 方格規矩鏡

井原ヤリミソ遺跡D号木棺墓（福岡県前原市）

直径18.6cm
木棺を納める墓坑から出土。完形の銅鏡を破砕したものか。

36-2 連弧文鏡（内行花文鏡）

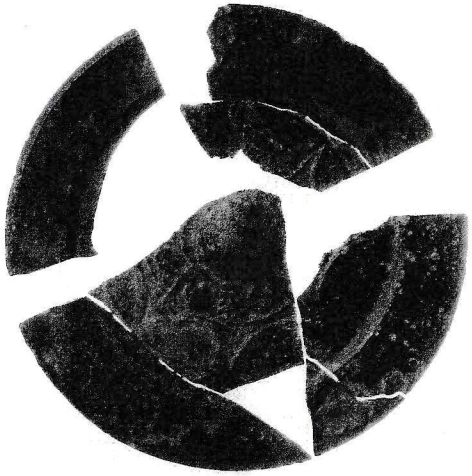
井原ヤリミソ遺跡D号木棺墓（福岡県前原市）

直径約一七・〇cm（復元径）
木棺を納める墓坑から出土。破鏡を破砕して納める。

37-1 連弧文鏡（内行花文鏡）

師氏遺跡７号墓棺墓（福岡市）

直径18.0cm（復元径）
墓坑内から出土した銅鏡で、鏡座を欠く。破砕した銅鏡から鏡座部分を取り除いたものか。



37-4 連弧文鏡（内行花文鏡）

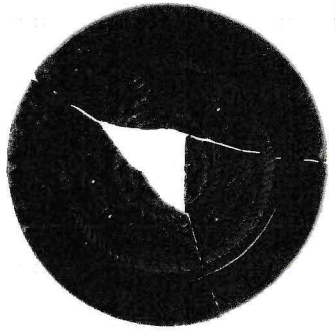
潤地頭給遺跡木棺墓（福岡県前原市）

直径10.2cm（復元径）
撹乱を受けた木棺墓から出土。銅鏡片は散在するが、その残りの程度から破砕された可能性もある。

36-4 連弧文鏡（内行花文鏡）

千房遺跡10号石棺墓（佐賀県伊万里市）

直径19.7cm
撹乱を受けた石棺墓から出土。一部を欠くものの、ほぼ完形。破砕鏡の可能性がある。



35-5 龍虎文鏡

三津永田遺跡105号甕棺墓（佐賀県吉野ヶ里町）

直径9.2cm
甕棺の副葬品に破砕された銅鏡を納める。銅鏡はほぼ完形に復元されるか鏡を欠く。

・カラー
・右頁全面に、大きく掲載下さい。
・写真(鏡)をもう3ミリだけ大きくする。空白部をつめる。
(全てゴバイ)

1424 写真図版 185 破砕鏡
1366
『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館 平成18年10月発行、34・40頁。
(第3巻) 631

41

「方形周溝墓」を墓制としていたのであろう。

※なお、第二章「方形周溝墓」において「蔚山西北西約六㎞の茶雲洞遺跡で、平面U字形の周溝を持つ木棺墓が発見された。（写真図版14参照）扶余系殷民の子孫達が、新羅においても、方形周溝墓を築いていたのだろう」

と述べた。

※新羅国王の子「天之日矛」（天日槍）な、扶余系殷民の子孫であったとはいえ、

「当初の弥生人らの墓制である」「方形周溝墓を採用していたのではなかろうか。

コクヨ ケー20 20×20

H30(2018)12.10用へ

「起源」項6行 「起」到達する」項
㊥328-16 ㊥クク3-2ページ 末

ク73-18/18

㊥328-16

㊥1444-4

「まっとう」次ページ 4行 はかながら ㊥クク3-1ページ 17行
とうてく統治 魏志倭人伝 39行
「とはいえ」前ページ 10行 自分で割ったのかも知れない

前頁へ

(10) だが、伊都国王達は、長期間、皆倭国に統属していたのだった。(既述)

(11) そーたわけで、倭人達の風習を多く取り入れ、遺体を、割竹形木棺の内におさめ、破砕された方形周溝墓に、埋葬した。

(12) つまり、平原遺跡の地に葬られた人は、神功皇后(天照大神)の母方の祖先と深い繋がりがあったのだろう。(第一表参照)

(13) あえていえば、その女性は、倭国の王族の娘で、伊都国に嫁いできていたのではなかろうか。

などとも思われるが、確証はない。

銅鏡や、装身具等多数をそえ、

㊍

下13/11
13/11

コクヨ ケ-20 20×20

see! 次頁。
扶余系朝民が重要そうだから書かない）

こと

774P- 1/16 場合 次頁 17行

大鏡が映した世界 44頁

《銅鏡の鋳造》

図 銅鏡を製造するには、高度な技術が必要である。

・↑↑鋳型作りから始まって、溶解、鋳造、研磨など幾つもの工程を経なければならない。（以下、⑦ー四四し四五頁参照）

図 鋳型には、土型と石型の二種類がある。

・土型は、脆いため、毀れやすい。

・石型は、鋳造後、砥石などに再利用される。

ことが多い。

・このため、土型も石型も、出土する量が極めて少ない。

図 土型は東アジアで広く用いられており、漢鏡の多くがこの型で鋳造されたと考えられる。

・日本では奈良県唐古・鍵遺跡で外枠鋳型の可能性のあるものが発見されており、福岡県平原一号墓から出土した大型仿製鏡などもこの種の型を使用したと見られる。

図 石型は中国東北部の遼寧青銅器文化の影響

こと 634

下で生まれたといわれ、福岡地方で出土した鋳型のほとんどがこの種類である。（第〇図参照）

(1) 扶余系殷民の子孫らは土製の鋳型を用いた。

(2) 箕子の子孫らは石製の鋳型を用いた。

■「鏡」の鋳造に当って

と単純に割り切れるのかどうか、現時点では速断できない。

■なおすでに述べた通り

(イ) 和歌山県堅田遺跡から、「鉇」の石製鋳型が出土した。（写真図版64参照）

(ロ) 大阪府東奈良遺跡から、「流水文銅鐸」を鋳造するための石製鋳型が出土した。（写真図版78参照）

というのだから、箕子の子孫達のみならず、扶余系殷民の子孫達も、石製の鋳型を作る場合があったと解される。

但し、土製の鋳型と、石製の鋳型とを、どのように使い分けていたのか、詳細はよく分からない。

774P — 3/16

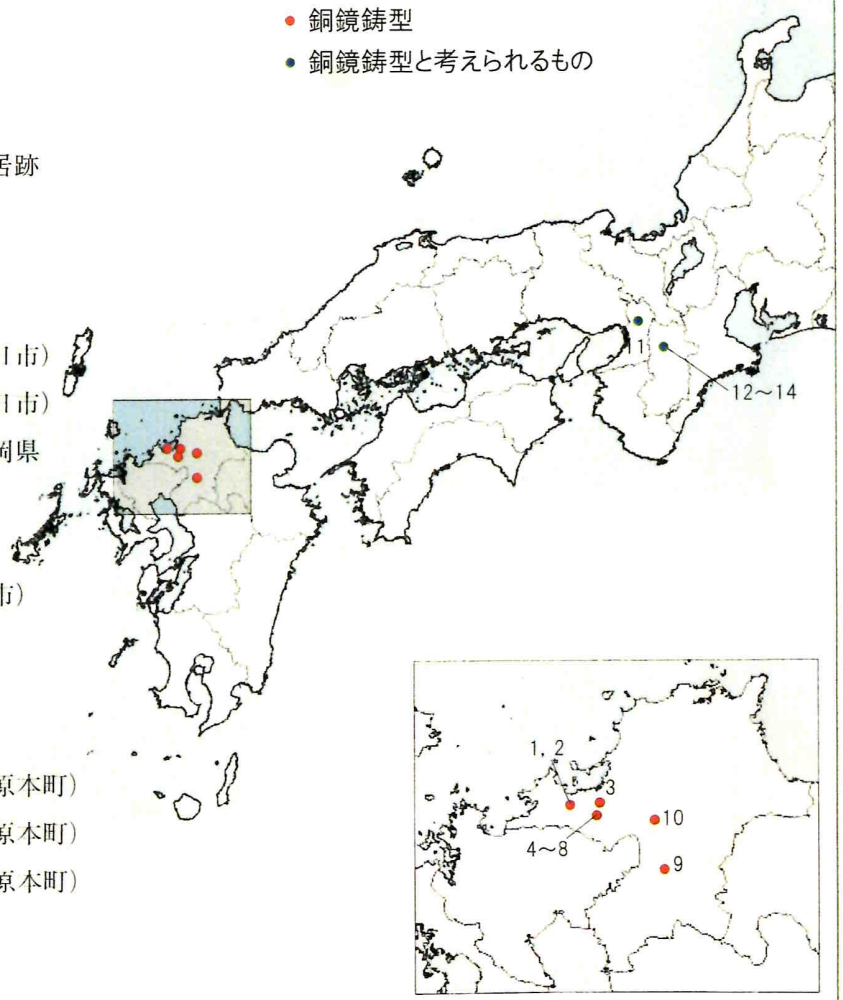
外枠トル

- カラー
- 頁の上半分に大きく掲載下さい。

トル 文字を大きなゴチに変えて下さい。

遺　跡　名

1．飯倉D遺跡（1次、福岡市）住居跡
2．飯倉D遺跡（1次、福岡市）溝
3．井尻B遺跡（6次、福岡市）
4．須玖永田遺跡（福岡県春日市）
5．須玖坂本遺跡（1次、福岡県春日市）
6．須玖坂本遺跡（試掘、福岡県春日市）
7．須玖坂本遺跡B地点（2次、福岡県春日市）
8．野藤遺跡（福岡県春日市）
9．益生田寺徳遺跡（福岡県久留米市）—鏡面・鏡背
10．ヒルハタ遺跡（福岡県筑前町）
11．垂水遺跡（大阪府吹田市）
12．唐古・鍵遺跡（3次、奈良県田原本町）
13．唐古・鍵遺跡（3次、奈良県田原本町）
14．唐古・鍵遺跡（61次、奈良県田原本町）



内枠はママ

142G 第213図　銅鏡鋳型の出土地（国内）

132G
『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館、平成18年8月発行、44頁参照。

636

《八咫鏡》

■非常に興味深いことがある。

■平原遺跡一号墓から出土した大鏡□大型内行花文鏡□〔同笵鏡五面〕の直径は、四六・五㌢であるという。（第八章〔平原遺跡〕の冒頭において既述）

□これら巨大鏡の外周（円周）の長さは、直径×九（三・一四）によって求められ、一四六・〇一㌢という数値が得られる。

□一尋を一八〇㌢とすると、----------その十分の一である尺は一八㌢だから、八尺は、一四四㌢である。《八尺鏡》

□伊勢神宮の神鏡□八尺鏡□の形態は一切公にされていないものの、□皇太神宮儀式帳□が□御樋代□（八尺鏡を奉安して神座に置く容器）に関して、

（※1448ページ-1/2）

なお、円周が四四㌢の直径は、四五・八六㌢（約四六㌢）である。

という計算になる。（※四□の数値はかなり近似しているといえよう）

□伊勢神宮の神鏡□八尺鏡□の形態は一切公にされていないものの、□皇太神宮儀式帳□が□御樋代□（八尺鏡を奉安して神座に置く容器）に関して、

（※1442ページ-2/3）

（※1448ページ-1/2）

（※1444ページ-1/3）

（※1442ページ-1/3）

（※1444ページ-1/3）

（※1448ページ-1/2）

（※1442ページ-2

「御樋代一具。径二尺。内一尺六寸三分」

と述べている。

・つまり、御樋代の外径は二尺（約六〇㌢）で、内径は一尺六寸三分（約四九㌢）である、と解される。（＊一尺＝三〇・三㌢として計算）

・そこで、

「伊勢神宮の八咫鏡は、その寸法以下の直径の円形銅鏡と推定されている」

という。（「日本書紀」(上)日本古典文学大系 岩波書店、補注二―十九参照）

※但し「御樋代は黄金製（椙円形）」ともいう。（「広辞苑」参照）

◎あれば少しばかり余裕をもたせて

《内径が一尺六寸三分（約四九㌢）の容器の中に、直径四六㌢程の八咫鏡が納められているのだろう》

と察せられる。

そして、明言できないものの、

《神墓の「八咫鏡」は、平原遺跡一号墓から出土した大鏡（五面）とほぼ同様の大きさなのではなかろうか》

と想像される。

改行

同文 ㊥1442ページ1/3 ㊐2528ページ 御神体代

㊥1442ページ1/3 ㊐2528ページ 未

㊥1442ページ2/3から移した

「かも知れない」の4ページ目 10/5 13:11

図

あえていえば

〈外径二尺、内径一尺六寸三分の容器（縦断面半楕円状容器）の外縁部（内周側）にはく八咫鏡を取り出す時に左・右の指先を入れる為の二ヶ所の切欠部が設けられているのではなかろうか〉

などとも思われるが、いうまでもなく憶測の域を出ない。（第214図参照）

＊もーかーたら、

〈この二ヶ所の切欠部が外方に大きく突出していて、㐂楕円形状凹に見えた〉

あたり

図

なお、伊勢の皇大神宮（内宮）で「八咫鏡」を奉安して神座に置く器「黄金製楕円形の器」を「御神体代」といい、その御神代を納める具を「御船代」という。

〈御船代は、形状が船に似ているから名づけた〉

のかも知れないが

容器の上面部が

「だえん」起こし 前頁中央

639

前頁20行目

コクヨ ケー20 20×20

られたといわれる〉という。（「広辞苑」〈御樋代〉〈御船代〉参照）

㊥伊勢神宮の「御船代」には、取っ手が、突出するように固着されている。（第215図〈貞和御飾記による伊勢神宮の御船代〉。空真図版186〈石上神宮の御船代〉参照）

㊥なお、さらに「更につくられて、皇居内に安置され歴代の天皇へ伝えられた神璽の鏡は、径八寸許（約二四センチ）であった」という。（「扶桑略記」村上天皇条。他参照）第二十章「単位」において詳述したい。（※概略、八咫鏡の半分の直径および外周とされたようである。第216図参照）

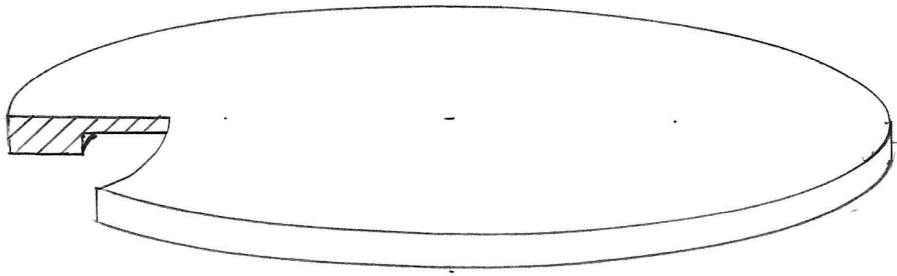
㊥補足すると、伊勢神宮内宮の神体「八咫鏡」について、「式年遷宮では、この八咫鏡が移される。しかし、八咫鏡を実際に見た天皇は誰もいない」といわれている」という。（「朝日新聞」平成二十五年九月二十九日付〈伊勢と出雲〉参照）

・右頁の右上（1/4頁）に
配置して下さい。

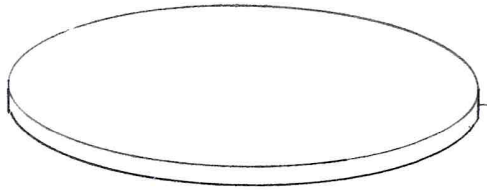
・トレースして下さい。
実線：0.4ミリ
ハッチング：0.1ミリ

・中心線不要。

15° 12

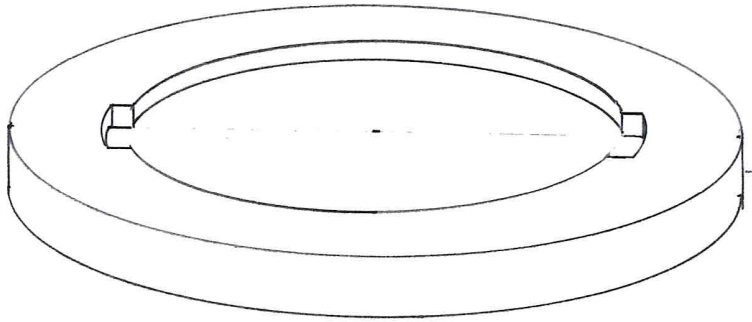


だえんけいふた
楕円形の蓋



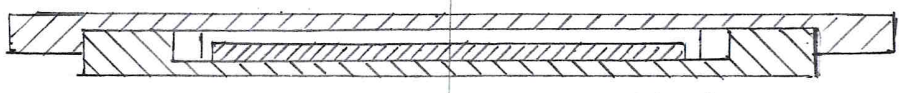
やたのかがみ
八咫鏡

20° 64
鉄



だえんけいようき
楕円形の容器
（御樋代）

20° 100
20° 68



半宇アキ

第214図 八咫鏡と御樋代の想像図

641

12G
もしかしたら御樋代の中に
『八咫鏡』および『八坂瓊の曲玉』が
納められているのかも知れない。

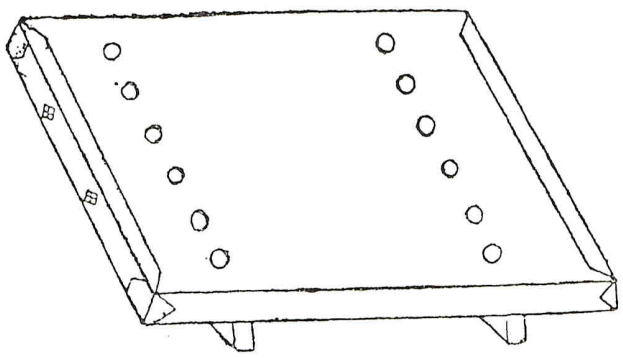
14GG

（宙ファイル 19/15 P）
（宙1444-3/3）八咫鏡と共に送られた鏡 対比図

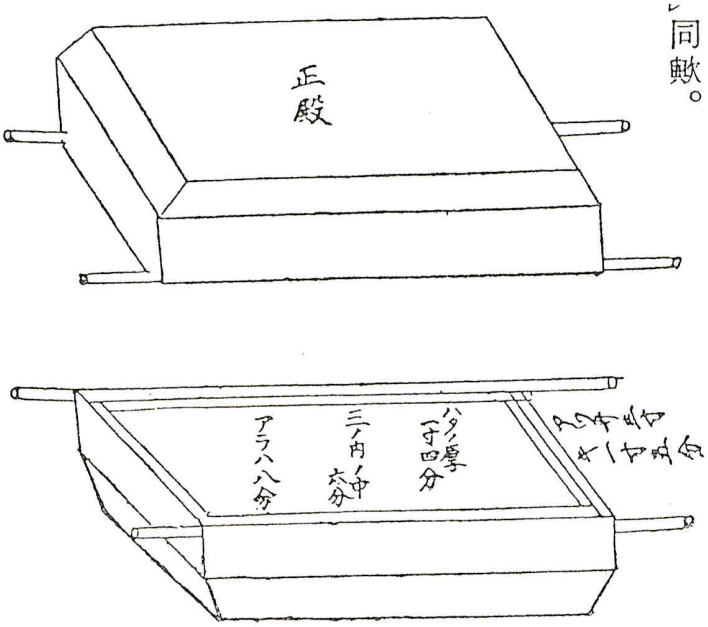
八咫鏡の変遷表（オリ表）平14(1)-156
H28(2016)1.11 古閑作図。

右頁の上下にわたり　左半分に
はみ出して大きく
掲載
下さい

一正宮御床二脚也。一脚長八尺一寸。横四尺三分。高一尺上ニハ小鋪一方六隻。雨方十二隻。
送官符云。二脚料平金三十二隻。枚別各一寸。
端ハメニ菱釘二隻宛。
送官符云。二脚
料花形釘四十六
隻。径七分。
角ノ折目毎ニ金物
アリ。
送官符云。肱金
捌勾。長各一尺七寸。片方六寸。片方四寸七分。弘一寸九分。并花形打堺。穴各十四口。
竿足ノ切目ニ有ニ
金物。
送官符云。桶尻
八口。弘四寸。厚三寸。高三寸。



同御船代（正殿）　長六尺一寸五分。横二尺四寸五分。或七尺六寸之内六尺四寸身宛（手崎各六寸）云々。弘二尺五寸。高二尺五寸。於ニ假殿一例者。寸法短也。或四尺。此外角長四寸六分宛。合四尺九寸二分。先規所レ不レ同歟。



第215図　『貞和御飾記』による御船代（下）とそれを安置する御床（上）。（群書類従による）

伊勢神宮の

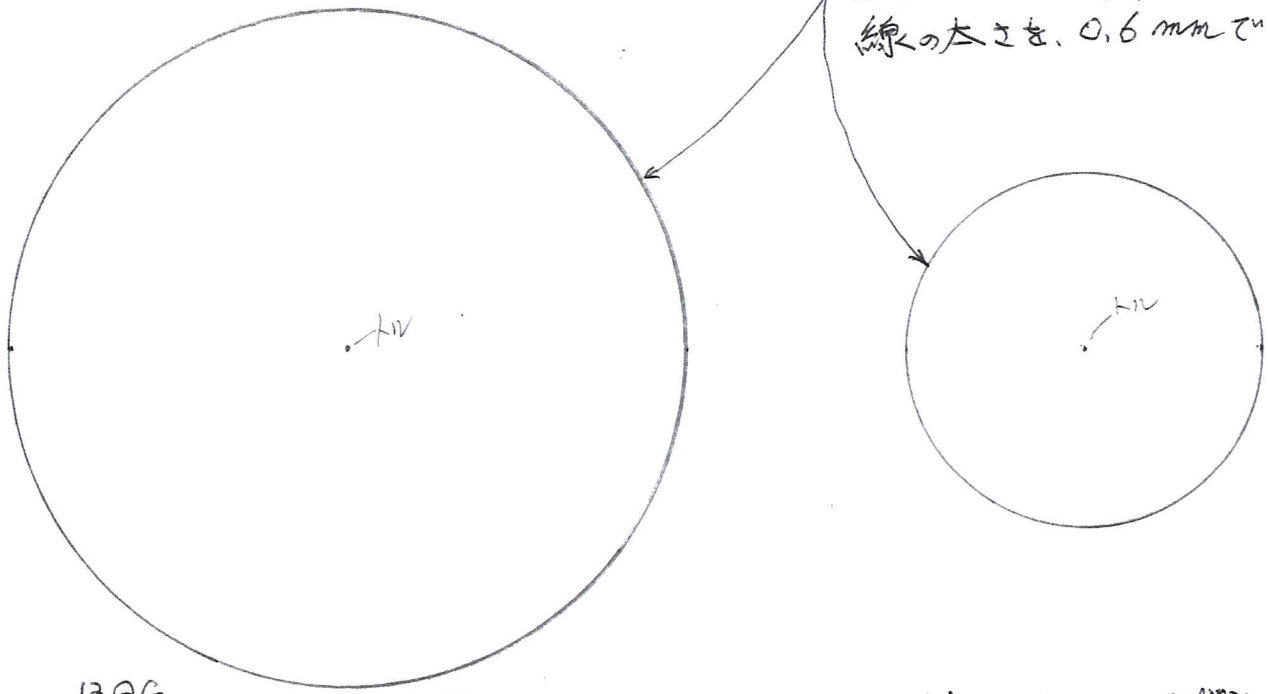
• これと同じ容器が、唐墓の壁画に描かれている。
『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館、平成18年10月7日発行、60~61頁参照。

左 上半分
右頁の~~左上1/4頁~~に大きく掲載下さい。

1444P-3/3

774P 10/16

〔線の外側－線の外側間の〕
直径を、2対1にして下さい。
線の太さを、0.6 mmで作図お願いします。



13QG 八咫鏡（やたのかがみ）

12QG ・外周8尺（144cm）、直径約46cm。

13QG 更に造られた鏡（さらにつくられたかがみ）

・外周4尺（72cm）、直径約23cm（8寸許り）

14QG 第216図 八咫鏡（やたのかがみ）と更に造られた鏡（さらにつくられたかがみ）（想像）

半字アキ

643

774-7/15 9/15 八咫鏡の三 1444P-3/3 同旨
3086P 19行

左頁の下

前頁（八咫鏡 更に造られた鏡）
の下に掲載下さい。

八咫鏡と 更に造られた鏡

■「太伯の後」と自称する倭人達は、周の尺度を用いていたのだろう。

・周の尺度には、①１尺＝２３．０４cm、②１尺＝２２．５０cm、③１尺＝１９．９１cm等があったという。（「漢和辞典」小林信明、小学館、末尾の 114 頁参照）

・倭人は、【１尺＝２２．５０cm】を用いていたようだ。

①奈良県明日香村で発見された水時計遺跡は、幅１．８m（８尺）の溝に囲まれ、高さ約１m、一辺２２．５m（１００尺）の正方形の基壇の上に立っていた。

②平城宮第２次大極殿の正面に開く閤門（こうもん）は、東西２２．５m（１００尺）、南北９m（４０尺）の基壇建物であることが分かった、

と言われている。

【 咫（た） 】（ 1咫＝周の1尺(22. 5cm)の8寸＝18cm ）

■皇大神宮儀式帳所伝の神鏡容器の寸法は、『外径２尺』、『内径１尺６寸３分』であるという。

・このことから、『八咫鏡』の直径は、１．６３ × ３０．３cm≒約４９cm以下の寸法の円形銅鏡と推察される。

・少し余裕をみて、内径１尺６寸３分（約４９cm）の容器の中に、直径約４６cm、外周が約１４４cm＝８咫 の鏡がおさめられているのではなかろうか。

・なお、福岡県平原（ひらばる）遺跡から、直径４６．５cmの銅鏡（日本国内産、５面の同型鏡）が出土している。

■一方、『更に造られた神璽の鏡』（歴代の践祚（せんそ）の時に用いられる鏡）は、「扶桑略記」村上天皇、天徳（てんとく）４年（９６０）条によると、「径８寸許（ばかり）」であったという。

・『更に造られた神璽の鏡』の直径は、３０．３cm × ０．８≒２４．２cmばかりだったのであろう。

・もしも、『更に造られた神璽の鏡』の外周が、４咫であったとすると、４×１８cm＝７２cmだから、直径は、約２３cmとなり、「径８寸許（ばかり）」と言えそうだ。

■したがって、

「伊勢神宮の『八咫鏡』の大きさと比べれば、――――『更に造られた神璽の鏡』（歴代の践祚の時に用いられる鏡）は、だいたい半分の直径および外周であった」

と察せられる。

※法隆寺も、「１咫＝周の１尺（２２．５cm）の８寸＝１８cm」の単位を用いた可能性が高そうである。（要検討）

774P_11/16

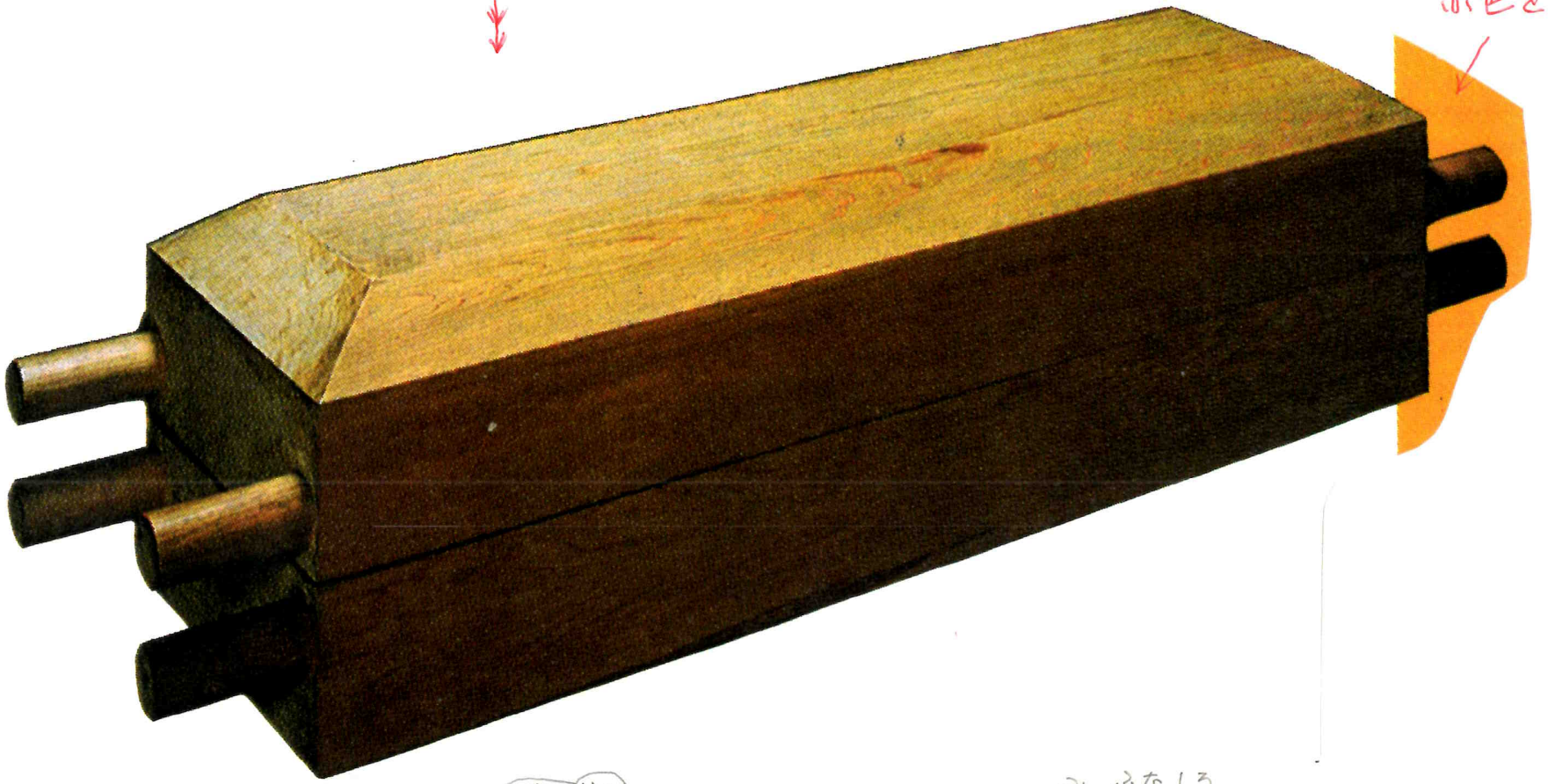
644

・ワープロ「伊勢神宮」のところに入力している。

⑤774°-5/9 ・カラー
⑥1442°~4' ・右頁の上半分に掲載。白い点トル

774P-12/16

赤色をトル



写真図版186 石上神宮（奈良県天理市）の御船代

『神々の里 心のふるさとをもとめて日本発見20 暁教育図書(株) 昭和56年2月1日発行 10頁参照』

・石上神宮所蔵の「七枝刀」が、この『御船代』の中に納められているのだろうか。

・左右の取っ手は、蓋の開閉、および御船代全体の持ち運びの為に設けられているのであろう。